

メッセージ：この新しい年に、あなたは誰のもとへ行くのでしょうか

おはようございます。新年あけましておめでとうございます。天の父なる神様の家へようこそ来られました。

このメッセージでは、紀元 29 年、ガリラヤのカペナウムにおいて語られたイエス様の教えの意味をお伝えします。イエス様は、湖の向こう側で奇跡的に食べ物を与えられた群衆と、ご自身の弟子たちに向かって語られました。このメッセージは、私たち一人ひとりに「2026 年に、私たちがイエス様から遠ざけてしまう誘惑とは何でしょうか」と自らに問いかけるよう促します。

多くの人々は、自分の理解を超えて主なる神様を信頼しないこと、また未知のものへの恐れによって、主なる神様から離れてしまいます。ここでは、私たちが抱きがちな幾つかの恐れを挙げています。しかし、心に恐れが入り込むとき、信仰は外へ出て行ってしまうということを覚えていてください。

地震 — 自然における災害

先週の木曜日の元日は、691 名の犠牲者を出した能登地震の 2 周年にあたりました。また、最近の日本のニュース速報によりますと 2025 年 12 月 22 日 午前 8 時 18 分に地震がありました。

日本およびその周辺海域では、最大マグニチュード 5.4 に達する強い地震活動の震源域となっています。科学者たちは、1 年以内に強力な「巨大地震（メガ地震）」が発生する可能性について警告しています。

皆さんは、「牧師先生、なぜ日本の人々にとって悲しみと死、破壊の日々を持ち出すのですか」と問いかねられるかもしれません。それは、私たちクリスチャンが、死と破壊によって、天におられるイエス様をその御座から引きずり下ろされることがけっしてあってはならないからです。

イエス様は、天と地の主なる神様であります。

詩篇 97 編 1 節は、地上のあらゆる出来事の上に神様が統治しておられることを、力強く宣言しています。

<詩編 97 篇 1 節>

主は全世界の王です。大地よ、喜んで跳びはねなさい。最果ての島々も喜びなさい。

ここで言われている「最果ての島々」とは、私たちの愛する日本を指しているように思われますが、同時に地上の多くの場所を意味しているのかもしれません。Charles H. Spurgeon (M&E) による言葉を引用します。

「嵐の恐怖のただ中で、稲妻のひらめきのように威厳が輝き、帝国の崩壊と王座の崩れ落ちるなかに、主なる神様の栄光は壮大に現される。」

神様は、クリスチャンに、神様を信頼し、信仰をもって、すべての歴史を永遠の光の中で見るとを求めておられます。神様は、災害が人々を襲うとき、特に私たちの愛する者たちが苦しむときに、その痛みを深い憐れみをもって共に本当に感じておられます。

C・H・Spurgeon は、これを示すために 19 世紀の詩を次のように添えています。

神様は神様であられる。すべてをご覧になり、すべてを聞いておられる。
私たちのあらゆる悩みを、あらゆる涙を。
魂よ、苦しみのただ中にあっても、忘れてはならない。
神様は永遠に、すべてを治めておられるのだ。

自然災害というものは存在しません。すべては神様が自然を支配しておられる真に超自然的なものです。＜詩編 97 篇 1 節＞言っているように、主は全世界の王です。

＜ローマ人への手紙 1 章 18 節＞で神様の御言葉はこう教えています。

＜ローマ人への手紙 1 章 18 節＞

しかし、真理を押しつける、罪深い邪悪な人々には、神の怒りが天から下ります。

神様は、善で聖なるお方であり続けるために、罪を犯し続ける人類に対して裁きを行い続けなければなりません。しかし私たちは、地震やあらゆる自然災害が、より永遠なる裁きの警告であることを知らなければなりません。それは、死後にすべての人に下される裁きです。

ヨハネの福音書第 6 章を読むと、イエス様は神様の永遠で正しい裁きが、ただ御子イエス様を信じることを拒む者にのみ下されることを教えておられるのが分かります。災害は、罪人を悔い改めへと導き、全能の神様を求めさせるための目的とされておられるのです。また、災害は、神様の愛する子どもたち、すなわちクリスチャンの信仰を試す手段ともなります。

全世界は罪に対する最終的な裁きという神様の警告を受けている

日本の人々だけが地震による苦しみを受けているわけではありません。2025 年には、マグニチュード 7.0 前後、またはそれ以上の地震が、フィリピン、ロシア、マスコリー諸島、アラスカ、パプアニューギニア、トンガ、ミャンマー、ケイマン諸島、そして日本で発生しました。日本やこれらの国々の多くは、太平洋沿岸、いわゆる「環太平洋火山帯（リング・オブ・ファイア）」の近くに位置しています。これは地球という惑星の地質学的な特徴です。

神様は自然を通して働かれますが、ご自身がどのように地球を創造されたかを否定されません。カリフォルニアで森林に近い地域に家を建てる人々は、山火事の季節に財産、あるいは命を失う可能性があります。もちろん、私たちの誰も、自分がどこに生まれるかを選んでいません。しかし、地球上のどこに住んでいても、危険は存在します。こうした危険への恐れが、クリスチャンをイエス様に従う道から離れさせようと誘惑があるかもしれません。

また私は、クリスチャンの真剣な祈りによって、神様が自然災害に関するご計画を変えられることが時にある、ということも知っています。イエス様は今なお、風と波、そして自然を支配されるお方です。しかし、私たちは、全地に満ちる人類の罪に対して神様がその怒りを表されることを、やめるよう要求することはできません。

アジアで差し迫った戦争は起こるのか？

2026 年において、信仰に代わって恐れが入り込むもう一つの理由は中国です。現在の北京政府が、何十年にもわたって兵器の備蓄を増強してきたことは、今や明らかです。また、中国では子どもたちに、共産党の戦意を鼓舞する歌を学ばせながら、「銃で遊ぶ」ことも教えられています。そこで問われるのは、中国がこれらの兵器を実際に使用し、2026 年に台湾へ侵攻するのかどうか、ということです。そして、もしそうだとしたら、なぜ日本ではないと言えるのでしょうか。

戦争は、人類の罪深い性質から生じる悪です。それは、イエス様が再び来られる時まで続いています。イエス様の弟子たちは、主が再臨される直前にどのようなしるしが起こるのかを教えてください、イエス様に尋ねました。＜マタイの福音書 24 章 4 節- 7 節＞において、彼らは次のように尋ねました。

＜マタイの福音書 24 章 4 節- 7 節＞

4 そこでイエスは、彼らに説明されました。「だれにもだまされないようにしなさい。

5 そのうち、自分こそキリストだと名乗る者が大ぜい現れて、多くの人を惑わすでしょう。

6 また、あちらこちらで戦争が始まったといううわさが流れるでしょう。だがそれは、わたしがもう一度来る時の前兆ではありません。こういう現象は必ず起こりますが、それでもまだ、終わりが来たものではありません。

7 民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、至る所できんと地震が起こります。

ここでイエス様は、私が 2026 年に向けて今日ここで語った、「信仰に対して恐れを生み出す 2 つの主要な問題」を含めておられました。

- 戦争と戦争のうわさ
中国による脅威
- 各地で起こる地震
日本における巨大地震、また科学者たちも、世界各地で地震の発生がより頻繁になっていることに同意しています。

弟子たちへのイエス様の答え、そして今日のすべてのクリスチャンへの答えは、＜マタイの福音書 24 章 6 節後半＞にあります。

＜マタイの福音書 24 章 6 節＞

また、あちらこちらで戦争が始まったといううわさが流れるでしょう。だがそれは、わたしがもう一度来る時の前兆ではありません。こういう現象は必ず起こりますが、それでもまだ、終わりが来たものではありません。

ここで（英訳で）「うろたえる」と訳されている言葉の、新約聖書ギリシア語原文は *throeō* です。これは、新約聖書の用例において、「心を乱されること」「不安にさせられること」「動揺すること」「警戒心や恐怖にとらわれること」を意味します。私たちがイエス様と神様の御言葉に信仰を持っているならば、＜詩篇 97 篇 1 節＞にあるように、心を乱す必要はありません。

＜詩編 97 篇 1 節＞

主は全世界の王です。 大地よ、喜んで跳びはねなさい。 最果ての島々も喜びなさい。

主なる神様がこの勧めをもって弟子たちに答えられたのは、励ましとしてであったことに注目すべきです。ただし、その語り口には、ある程度の厳しさも含まれていたのではないかと私は思います。したがって、弟子たちは恐れよりも信仰を持たなければならなかったのです。

イエス様は、人間がある程度の情報を必要とすることを否定されたものではありません。信仰を持ち、恐れてはならないという主なる神様の命令の中には、これから地上に起こる出来事について語られることも含まれていました。しかし、主なる神様は今日の災害をも見据えておられました。イエス様は、私たちの恐れに勝る信仰は、私たちが直面するさまざまな災害にではなく、主なる神様ご自身への私たちの信仰により頼まなければいけないことを知っておられました。私たちは、心配を信仰にまさる恐れの言い訳にしてはいけません。

2026 年、あなたはだれのもとへ行きますか？

ここで私たちは、紀元 29 年、ガリラヤ湖畔のカペナウムで、イエス様が群衆に語られた霊的な御言葉に目を向けてみましょう。これらの言葉は、使徒ヨハネによって記録されています。＜ヨハネの福音書 6 章 24 節、28 節-29 節＞を読みます。

＜ヨハネの福音書 6 章 24 節、28 節-29 節＞

24 しかし、イエスも弟子たちもそこにはいないとわかると、人々はその舟に乗り込み、イエスを捜してカペナウムまで行きました。

28 「神様に満足していただくには、どうしたらいいのでしょうか。」

29 「神が遣わされた者を信じることです。それが、神の望んでおられることです。」

そこにいた人々は皆、ユダヤ人だったことを思い出してください。彼らの信じていたものは、神様がモーセに与えられた律法についてでした。そのため、彼らの最初の問いは「私たちは何をすればよいのですか」というものでした。イエス様は、「何をするか」ではなく、「何を信じるか」であり、この信仰を生み出すために神様が彼らのうちに働いておられるのだと答えられます。つまりイエス様は、「神様が遣わされたイエス様をあなたが信じることであり」と語られました。

次にイエス様は、ご自身こそが神様によって遣わされたその方であることを、彼らに納得させようとされます。イエス様は、モーセの超自然的な賜物に関する彼らの議論に反論されます。実際に、彼らはマナを与えられた神様のかわりにその功績をモーセに帰しているのです。

旧約聖書＜出エジプト記 16 章 4 節および 31 節＞を読みます。

＜出エジプト記 16 章 4 節および 31 節＞

4 主はモーセに言いました。「天からパンを降らせよう。毎日みんな外へ出て、その日に必要なだけ集めなさい。これは、わたしの指示を守るかどうかを見るテストにもなる。

31 この食べ物ほのちに、「マナ」〔「これはいったい何だろう」の意〕と呼ばれるようになりました。コエンドロ（エジプトやパレスチナ地域に自生する一年草）の種のように白く、平べったくて、はちみつ入りのパンのような味がしました。

次に私たちは、ユダヤ人たちがモーセに対してイエス様にどのように挑んだかを見ます。＜ヨハネの福音書 6 章 30 節-34 節＞を読みます。

＜ヨハネの福音書 6 章 30 節-34 節＞

30 ・ 31 「あなたがメシヤなら、その証拠に、もっといろいろな奇跡を見せてください。毎日ただでパンを下さるとか……。ちょうど先祖たちが荒野を旅した時、毎日パンを与えられたように。

『モーセは天からのパンを彼らに与えた』と聖書には書いてあります。」

32 「そのパンを与えたのは、モーセではありません。わたしの父です。そして今、父はあなたがたに、天からのほんとうのパンを下さるおつもりです。

33 ほんとうのパンとは、神から遣わされて天から来た一人の人のことです。その人が、世の人々にいのちを与えるのです。」

34 「先生。ぜひそのパンを、私たちにも一生の間、いつも下さい。」

イエス様は、栄光をモーセに帰し、天の父なる神様に帰していない彼らの考えを、すぐに正されました。しかし、イエス様はこの点について議論を続けることはなさらず、この議論を超自然的な肉体のパンから、天から来た真の霊的なパン、すなわちイエス様ご自身へと移されました。＜ヨハネの福音書 6 章 35 節＞を読みます。

＜ヨハネの福音書 6 章 35 節＞

35 「わたしが、そのいのちのパンなのです。わたしのところに来る人は、二度と飢えることがありません。わたしを信じる人は、決して渴くことがありません。

さらに、＜ヨハネの福音書 6 章 40 節＞においてです。

＜ヨハネの福音書 6 章 40 節＞

40 事実、父は、子を信じる者がみな、永遠のいのちを得、終わりの日に復活することを願っておられるのです。」

イエス様は彼らのメシヤ（救い主）を待ち望む信仰に挑まれます。しかし、またイエス様は天の父なる神様と御子との関係を明らかにされます。「御子を見て信じる者は皆、永遠のいのちを持ち、わたしはその人を終わりの日によみがえらせる」と言われるのです。

そのメシヤ（救い主）を見ているユダヤ人であれば、「終わりの日」という表現や、時の終わりに神様によって行われる罪の裁きという表現に気づくべきでした。それにもかかわらず、彼らは、イエス様の上に注がれている御霊の油注ぎによって心を開かれ、真理を受け入れることに、心を閉ざしていました。

＜ヨハネの福音書 6 章 41-42 節＞を読みます。

＜ヨハネの福音書 6 章 41-42 節＞

41 ユダヤ人たちはイエスが、「わたしは天から下って来たパンです」とはっきり言われたので、ぶつぶつ文句を言い始めました。

42 「たかがヨセフの息子イエスではないか。父親も母親もよく知っている。なのに『わたしは天から下って来た』などと、とんでもないことを言って」と、彼らはつぶやきました。

ユダヤ人たちは、メシヤに関して考えるようになっていました。しかし彼らは、イエス様がベツレヘムではなくナザレから来たという点を理由に、イエス様がメシヤであるはずがないと考えました。そこでイエス様は、＜ヨハネの福音書 6 章 47 節-51 節＞において、再び議論を肉体的・物理的な次元ではなく、霊的な次元へと引き戻されます。

＜ヨハネの福音書 6 章 47 節-51 節＞

47 よく言っておきます。わたしを信じている人はだれでも、すでに永遠のいのちを得ているのです。

48 わたしがいのちのパンなのです。

49 あなたがたの先祖は、荒野で、空から降って来たパンを食べましたが、結局はみな死んでしまいました。

50 けれども、天から下って来たパンは違います。それを食べる人は永遠のいのちをいただくのです。

51 わたしが、その天から下って来たいのちのパンなのです。このパンを食べる人はだれでも永遠に生きます。このパンは、人類の救いのためにささげるわたしの体なのです。」

しかし、ユダヤ人の群衆も、さらには弟子たちでさえも、その霊的なつながりを理解することができませんでした。群衆はイエス様を人を食べるという（カニバリズム）であると非難し、その結果、多くの弟子たちはイエス様に従うのをやめてしまいました。

イエス様の一連の議論の焦点は一貫して、目に見える出来事から、イエス様を信じるという霊的出来事へ人々を導くことにありました。すなわち、イエス様がどこから来られたのか、そしてイエス様が本当はだれであるのか、という点です。人を食べるという（カニバリズム）という非難は、彼らがイエス様の教え全体の霊的な本質を完全に見失っていたことを示していました。

<ヨハネの福音書 6 章 5 2 節-5 7 節>

52 ユダヤ人たちは、イエスがいったい何を言っているのかと、あれこれ議論し始めました。「なんてことを言うんだ。自分の体を食べさせるなんて、そんなことができるはずないじゃないか。」

53 そこでイエスは、続けてお話しになりました。「よく言っておきます。メシヤの肉を食べ、その血を飲まなければ、永遠のいのちを得ることはできません。

54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む人はみな、永遠のいのちを持ちます。わたしは終わりの日にその人を復活させます。

55 わたしの肉はほんとうの食べ物、わたしの血はほんとうの飲み物です。

56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む人はみな、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。

57 わたしは、わたしをお遣わしになった、いのちなる神の力によって生きています。同じように、わたしを食べる人は、わたしによって生きるのです。

<ヨハネの福音書 6 章 6 0 節-6 3 節>

永遠のいのちの言葉

60 これには、弟子たちでさえ思わず、「なんとむずかしい話だ。さっぱりわからない」ともらすほどでした。

61 それに気づいたイエスは、彼らに言われました。「こんなことでつまづくのですか。

62 そんなことでは、メシヤ（救い主）のわたしが天に帰るのを見たら、いったいどう思うことでしょう。

63 いいですか。ただ聖霊だけが永遠のいのちを与えてくださいます。肉体的にこの世に生まれただけでは、永遠のいのちはいただけません。今わたしがあなたがたに話したのは、まさにこのことで、どうしたら、ほんとうの霊のいのちをいただけるかということなのです。

ここで主なる神様は「肉は何の役にも立たない」と語られます。この言葉は、一見すると<ヨハネの福音書 6 章 54 節>の御言葉と矛盾しているように聞こえます。

<ヨハネの福音書 6 章 54 節>

54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む人はみな、永遠のいのちを持ちます。わたしは終わりの日にその人を復活させます。

しかし、先ほど述べたように、この議論全体は、イエス様が群衆を物理的・肉体的な理解から、霊的な真理へと導こうとしておられたことにありました。そして、この説教の冒頭である<ヨハネの福音書 6 章 29 節>に立ち返ります。

<ヨハネの福音書 6 章 29 節>

29 「神が遣わされた者を信じることです。それが、神の望んでおられることです。」

イエス様は、ご自身の肉が裂かれ、血が流されるという犠牲を信じるこそが、霊的な意味において「ご自身の肉を食べ、血を飲むこと」であると語っておられるのです。イエス様は、将来起こるご自身の十字架上での犠牲を指し示していました。信じるという行為は、肉体的な行動ではなく、霊的な出来事です。したがって、十字架におけるイエス様の死という物理的な出来事を信じるのが、私たちにとっての霊的な食物となるのです。

恐れに対抗する主を信頼する信仰

<ヨハネの福音書 6 章 66 節>

66 この時から、多くの弟子たちがイエスから離れ、もはや行動を共にしなくなりました。

かつての弟子たちは、イエス様と共に永遠にあるという安全な場所を、自ら手放してしまいました。旧約聖書は、<箴言 3 章 5 節-6 節>において、このように教えています。

<箴言 3 章 5 節-6 節>

(4) ・ 5 神にも人にも喜ばれ、正しい判断力と英知を得たいなら、とことん主に信頼しなさい。決して自分に頼ってはいけません。

6 何をするにも、主を第一にきなさい。主がどうすればよいか教えてくださり、それを成功させてくださいます。

信仰が恐れに勝つかどうかの試練とは、イエス様に従う者が、人生における災害や困難に直面したとき、あるいは、地上でイエス様が語られたこと、または聖書の中で神様が語られていることが理解できないときです。そのような時、悪魔はイエス様に従う者を主イエス様に従うことをやめさせようと誘惑します。

このような時こそ、当時の弟子たちも、そして今日の私たちも、自分の理解を超えて、イエス様と天の父なる神様の御性質を信頼しなければいけません。残念なことに、カペナウムにいたこれらの弟子たちは、もはやイエス様と共に歩むことをやめてしまいました。彼らは、教師であり、神様の御子であるイエス様に、裏切り者、脱落者となりました。彼らは、イエス様を人間以上の存在として、本当の意味では信じていませんでした。

しかしその後、人類に再び希望と命が、荒々しくもたくましい漁師であったペテロから湧き出ます。<ヨハネの福音書 6 章 67 節-69 節>を読みます。

<ヨハネの福音書 6 章 67 節-69 節>

67 そこでイエスは、十二人の弟子たちに、「まさか、あなたがたは行ってしまわないでしょうね」とお尋ねになりました。

68 シモン・ペテロが即座に答えました。「何をおっしゃるんです、先生。あなたをさしおいて、ほかの人のところへ行くわけがないじゃありませんか。永遠のいのちを与えることばを握っているのは、あなただけなんですから。

69 私たちはそのことばを信じていますし、あなたが神のきよい御子だということも知っています。」

その瞬間、使徒ペテロは人間の心において永遠の全てに答え続けられる「主なる神様、わたしたちはだれのもとへ行きましょうか。」という発言で地上で最も偉大な神学者となりました。

私は、ペテロはこのとき、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は永遠の命を得る」というイエス様の言葉の意味を、完全には理解していなかったのではないかと思います。しかし、ペテロはイエス様を知っていました。彼は、イエス様のような神様の人に、これまで一度も出会ったことがありませんでした。そして、イエス様に代わる方など決して存在しないことを、ペテロは知っていました。

そのため、聖書が後に示すように、彼の信仰は当初は小さく、揺れ動くものでしたが、そこには主なる神様を愛する真実な心がありました。続いてペテロは「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」と言います。

＜ヨハネの福音書 6 章 69 節＞

69 私たちはそのことばを信じていますし、あなたが神のきよい御子だということも知っています。」

ペテロは、永遠に続く命こそが、この世の何ものにもまさって重要であることを知っていました。彼はイエス様を主なる神様であられ、神様の御子であられると告白しました。ペテロの信仰はその後成長し、やがて彼は教会の最初の指導者となりました。教会は、イエス様の死と復活、そして天への昇天からわずか数週間後の、ペンテコステの日に誕生しました。

では、あなたはどうか、クリスチャンの皆さん。もし 2026 年に大きな災害が起こったとしたらあなたは、だれのもとへ行くのでしょうか。

あなたが自然または人からの差し迫った災害に直面するとき、あなたは心を尽くして主なる神様に信頼し、自分自身の理解に頼らないでしょうか。私たちは、聖書の中に、イエス様とイエス様に忠実に従う方たちの完全な証しを持っています。私たちは、旧約聖書と新約聖書の中に神様の御言葉を持っています。しかし、本当の試練、あるいは本当に問われることは、「私たちの心の中で、イエス様にどのような思いを抱いているのか」ということです。ペテロの心は、イエス様への愛で満ちあふれていました。

建物の床が川のようにうねり、電柱が激しく揺れ動くとき、あなたの心は沈み込むでしょうか。それとも、わが魂を愛してくださるお方、イエス様を思い起こすでしょうか。

もし中国がアジアへ侵攻し始めたなら、あなたは永遠のいのちよりも、この世での肉体の命を、より大切なものとしてしまうでしょうか。イエス様は、＜マタイの福音書 10 章 28 節＞において人を恐れるのではなく、神様を恐れ、神様を畏れ敬うようにと、クリスチャンたちに教えられました。

＜マタイの福音書 10 章 28 節＞

体だけは殺せても、たましいには指一本ふれることもできないような人々を、恐れてはいけません。たましいも体も地獄に落とすことのできる神だけを恐れなさい。

世界各地で私たちがいる霊的な戦いだけでなく、現実の戦争のただ中に置かれているクリスチャンの兄弟姉妹のことを考えてください。

聖書は、使徒ペテロの信仰が後にイエス様の裁判の際にどのように恐れへと取って代わったかを私たちに伝えています。しかし神様は、彼を真の悔い改めへと導かれました。

イエス様の復活の後、イエス様はペテロに現れてくださいました。神様はペテロの信仰と栄光ある未来の希望を回復されました。その後、イエス様はキリストの福音を広めるための兵士としてご自身に仕えるためにペテロを再び召し出されました。ペテロにとってこの激しい試練は、やがて年月を経た後、聖霊なる神様の息吹のもとで、深い憐れみをもって＜ペテロの手紙 I 4 章 12 節-13 節＞を書き記すことを可能にしたのでした。

＜ペテロの手紙 I 4 章 12 節-13 節＞

12 愛する皆さん。炎のように燃えさかる試練に直面しても、あわてたり、おじけづいたりしてはいけません。ふりかかる試練は、決して思いがけないものでも、異常なものでもないからです。13 むしろ、その試練によってキリストと苦しみを分かち合えるのですから、喜びなさい。やがてキリストの栄光が現れる時、その栄光を共に受けて、すばらしい喜びを味わうためです。

Charles Spurgeon は次のように書きました。

「だれが価値のないものと金を交換するだろうか。
私たちはより良い光を見いだすまで誓って太陽をやめない。
より輝く愛する者が現れるまでは、主なる神様を離れることもない。
そして、そのようなことは決して起こりえないのだから、私たちは永久に主なる神様を堅くつかみ、神様の御名を私たちの腕に紋章のように結びつけるのである。」 (M&E)

またペテロそして Spurgeon の言葉のように、私たちにもイエス様に従い続けるために助けてくださる神様の御霊が与えられていることを、何が起ころうとも覚えていてください。

ここにおられるすべてのクリスチャンが、イエス様が地上に来られてから 2026 年となる今年に、その決意をしましょう。もしかすると、今年が主なる神様が現れてくださる年となるかもしれません。

もしあなたが、今なお罪ある者であられるなら、あなた自身はどうでしょうか。

あなたの人生は霧のようなもので、やがて吹き払われてしまいます。2026 年、あなたはだれのもとへ行くのでしょうか。

すべてのクリスチャンは、赦された罪人です。あなたは罪人として聖書のヨハネの福音書 6 章に登場する人々が知らなかったイエス様に関する完全な良い知らせ（福音）を持っています。

あなたは、神様のあなたへの愛のゆえに、イエス様が木に、すなわち十字架に釘づけられたお方であることを、思い描くことができます。＜ローマ人への手紙 5 章 8 節＞の聖書はあなたのための神様の驚くべき愛をあなたに語っています。

＜ローマ人への手紙 5 章 8 節＞

しかし、私たちがまだ罪人であった時、神はキリストを遣わしてくださいました。そのキリストが私たちのために死なれたことにより、神は私たちに大きな愛を示してくださいました。

このことを信じ、罪のある生き方から方向転換してイエス様へと向かうこと、そして、十字架におけるイエス様の死が、あなた自身のためであったと信じるなら、あなたはクリスチャンになります。神様は、あなたのために、イエス様を死者の中からよみがえらせてくださいました。

あなたが、十字架におけるイエス様の受難が自分のためであったと信じる時、あなたは霊的に、わたし（イエス様）の肉を食べ、わたし（イエス様）の血を飲んでいくのです。

あなたがこのことを信じる時、イエス様が約束されたとおりに、あなたは永遠のいのちを持ちます。

2026 年から、永遠のいのちを始めてみませんか。

あなたは今日から始めることができます。

あなたは永遠に生きる者となり、死の苦しみを再び味わうことはありません。

あなたは、イエス様とともに、そして神様のすべての子どもたちとともに、天国で永遠に生きるのです。さらにその後、この世を裁くために主なる神様が再び来られるとき、私たちは皆、イエス様とともに地上へ帰って来ます。

祈りましょう。